



TITLE:

乾隆の錢貴

AUTHOR(S):

黒田, 明伸

CITATION:

黒田, 明伸. 乾隆の錢貴. 東洋史研究 1987, 45(4): 692-723

ISSUE DATE:

1987-03-31

URL:

<https://doi.org/10.14989/154178>

RIGHT:

乾隆の錢貴

黒田明伸

- 一 問題の所在
- 二 錢貴の時代
- 三 制錢流通の構造
- 四 制錢流通の崩壊
- 五 結びにかえて

一 問題の所在

歴史的事實というものは極めて多様なものである。故にそれらを分析する際、いくつかの問題を自明のこと、すなわち與件として扱い考察の對象外におくものである。殊に貨幣のように、我々自身が日常のなかでその通用性を自明のものとしているものであれば尙更である。清代史についても、貨幣の問題はあらゆる事象と關わるものでありながら、それ自體を分析對象とすることは避けられてきた、といえる。

勿論、貨幣をめぐる研究はなされてこなかったわけではない。有名な嘉慶後半以降の銀貴錢賤問題のように銀錢比價の變動の研究には一定の蓄積があるし、太平天國に伴う咸豐年間の財政危機による通貨膨脹も研究對象とされている。だがそれらの關心は貨幣の運動そのものよりも、その結果としての國家の收奪の強化などといった富の分配への影響を主眼と

していたといえる。⁽¹⁾ また貨幣の機能に着目する姿勢に乏しかったことは、二つの貨幣の相對相場である銀錢比價を、その素材である銀と銅という貴金屬の比價と混同することを許してしまつた。⁽²⁾

ただ、非鑄貨と鑄貨という形態の差異もあつて、銀と錢が別の機能を果たす貨幣であるということ、すなわち前者が價値尺度としての役割が強く同時に高額取引に對應するのに對して、後者は専ら日常的小額通貨としての性格が強いというようなことは、認識されてきた。だがそれは解かれるべき問題の出發點を與えてくれているにすぎない。そもそも清朝はこの銀と錢という機能の異なつた二つの貨幣の間に固定相場を設定しなかつた。つまり錢は日常的小額通貨でありながら補助貨幣になりきらなかつたのである。そのこと自體特異なことなのだが、清朝中期にはその制錢を大量に鑄造している。それはいかなる歴史的意味を有するのか。

銀錢比價の變動は租稅納入に影響を及ぼすがために、清朝はその安定のために常に配慮をせねばならなかつたのであるが、清朝がその統治の前半において最も苦慮したのが錢相場の高騰、すなわち錢貴であつた。この錢貴と乾隆の制錢大量鑄造との間に因果關係があることは容易に予想しうる。しかしこの場合いかなる錢「貴」であつたのかにまで注意せねばならない。單一の通貨と實物とが相對するのであれば、通貨である錢の「貴」には實物の廉價が對應するはずである。だが當時、問題とされたのはむしろ實物の「貴」⁽³⁾、例えば穀貴すらが對應するような錢貴なのである。しかもこの錢貴は單純に銅の供給不足に原因を歸することはできない。むしろ銅供給が減少するのと同時に錢貴は錢賤に轉するのである。

このように一見不可解な現象を伴いつつ、錢貴は乾隆期に頂點を迎えるのであるが、錢貴とそれに對する清朝の通貨政策を分析することを通じて、當時の貨幣流通構造、ひいてはウェスタン・インパクト以前の中國の經濟構造の一端に觸れようとするのが本稿のねらいである。ただ一つ留意せねばならぬことがある。それは、經濟過程が貨幣に媒介されることを前提にしていない「前近代」社會では、貨幣そのものも市場原理のみでとらえるのは危険であるということである。⁽⁴⁾ とりわけ公財政が既に成熟していた社會では國家により創造される經濟過程との關係を抜きにしては、貨幣の機能を理解す

ることはできない⁽⁵⁾。制錢は實はその素材價格が名目價格を上回るものであつた⁽⁶⁾、というすでに知られている事象も國家の介入を考慮してこそ理解しうる。逆に言えば中國のように巨大な公財政を有する專制國家を考える場合、行財政活動の常態を見るだけでは見えてこない國家と社會の經濟過程との有機的關連が、貨幣を通じて現れることもあるのである。貨幣史研究の意義は何よりもそこにある。

二 錢 貴 の 時 代

制錢の鑄造體制とその鑄造數からして、乾隆の六〇年間を挟んで雍正から嘉慶までを貨幣史上のひとまとまりの時期としてとらえるのは、ほぼ承認してよいようである。京師の寶泉局・寶源局と並んで地方の錢局の鑄造が本格化し、その年間鑄造額は百萬串を單位とする水準に至る。裏返しのことであるが、この時期は雲南の銅產が盛んで波はあるもののなべて年一千萬斤以上の銅を制錢鑄造のために供給していたことが記録上は確認される。まずは當該時期の銅錢流通の在りかたを専ら政策の分析を通して歴史的に追ってみることにしよう（本稿で銅錢と記述した場合、制錢・小錢雙方を含む）。

順治から康熙そして雍正に及ぶ清初の貨幣政策は、明らかに一定の體制の確立に至るまでの試行錯誤の時期と位置づけられる。財政が未確立の順治期は政府側が一方的な過剰支出を強いられた時期であり、當五十大錢等を發行する事實上のデノミネイションや順治八年から一八年まで行われたように鈔發行の復活まで目論むが、それらは一時的な施策に終わり、結局一文制錢を基礎とする幣制に戻ることになる。

清初におけるその制錢の鑄造政策についてみると、二つの特徴が浮び上ってくる。一つはたび重なる制錢重量の變更である。制錢一文の重量は順治二年に一錢二分と定められた後、順治年間に一錢二分五厘、更に一錢四分と重量化する。それが康熙二三年には一舉に一錢（三・七三グラム）に輕量化されるのであるが、それも長續きせず同四年に一錢四分となり、雍正一二年にはとうとう一錢二分に回歸する。ここでは、一文⇨一錢の場合は私鑄の弊を激しくし一文⇨一錢

四分の場合は私銷の弊すなわち制錢を溶解して銅そのものとして商品化させることが問題となったことだけ確認しておく。⁽⁷⁾つまり重量變更は私鑄と私銷という相反する二つの行爲を同時に防止する均衡點を模索する過程であつたといえる。私鑄と私銷は互いに密接な關係にあるのだが、本論でこれから述べられる諸現象の陰においても常に作用していたのである。

もう一つの特徴は地方錢局の存廢が激しく、かつそれぞれの鑄造期間が短かつたことである。初期についてはなお不明であるが、雍正年間についてはその事情を知ることができる。雍正期の通貨政策（といっても銀の方は全く問題とされず専ら銅錢のみがあつたわけである）を通じて一貫しているのは、いかにして制錢の地方通用を圖るかという姿勢である。制錢の地方通用といつても貨幣流通の見られない地域に制錢を流通させるといふわけではない。雲南の場合のように基本的に銀使いが優勢だった邊境地域を結果として錢建てに誘導した例も一方ではあるが、根本的な問題は各地域で制錢と並行して通用していた私鑄の輕質銅貨すなわち小錢⁽⁸⁾をどのようにして流通から排除するかということであつた。

小錢對策はいくつかの段階に分れる。まず第一に採られた方策は現實に流通している小錢を強制的に官價で買付け（收買）⁽¹⁰⁾それを現地での制錢鑄造原料に充てようとするものである。雍正六年に甘肅では實行にうつされるが、それは現地の貨幣需要を無視するものであり實效あるものにはなりえなかつた。高い錢需要の下で現實に流通手段として機能している小錢を引上げるのならば、それに先立つてかなりの規模の代替通貨が積極的に投入されねばならなかつたのである。以後雍正中は各督撫の要請⁽¹¹⁾にもかかわらず小錢收買策は許可されなかつた。

續いて採られたのは嚴格な民間における銅の使用禁止と銅器の官買上げ政策であつた。何のための統制か。すなわちこれは小錢驅逐のための代替通貨たる制錢の鑄造原料の各地域での確保を企圖していたのである。この時期各省の錢局が新たに鑄錢を開始するが、それらは原則として原料を現地での銅器收買に仰ぐ構想であつた。⁽¹²⁾清朝は銅器納入をもつて未納分の地丁銀納税に代えることを許可するというような銅器供出奨励策まで打ちだしている（それは殆ど意味を持たなかつた

が。こうした民間の銅ストックを極力制限し通貨需給の管理を容易にしようとする方向は後の時代に於いてもみられ、往々繪空事に終わるのであるが、雍正期の銅禁は確かに實態を伴ったものであったようである。⁽¹⁴⁾

だが銅禁策は問題の解決にはならなかった。一つには、全ての銅の國家管理がそもそも不可能である以上、銅の供給が相對的に不足している状況での銅禁はかえって銅相場の上昇を招き、制錢の素材價格を名目價格から益々乖離させることにつながる。もう一つには、より重要なのだが、所詮民間「退藏」分の吸い上げでは地方の通貨不足状況の抜本的解決にはなりえなかったということである。小錢を收買するにせよ銅器を供出させるにしろ現存の銅ストックに依據するものである。それ故各錢局の鑄錢も短期に終わらざるをえなかった。事態はより積極的な介入を必要としていた。

ところでその雍正年間において鑄造されていたのは一文一錢四分という清代最良質の制錢であった。それは識別の容易さをもって小錢を驅逐させる役目を擔っていたといえるが、かえって慢性的な銅貨供給の不足に拍車をかけることになっていた。一錢二分錢に改鑄する雍正一二年當時、京師二局の一錢四分の錢一串⁽¹⁵⁾（二〇〇〇）文の鑄造コストは銀一・四〇三兩とされており、一兩一七〇〇文餘が生産費に見合った相場なのである。清初設定された一兩一〇〇〇文の官定の相場は言うまでもなく、既に錢貴が進行しつつあった市中の錢相場と比べてもかなり割高の生産費であり、鑄造すればそれだけ缺損を覺悟せねばならなかった。その背景に銅禁策と同時に原料銅の高騰の影響もあったことは間違いない。京師二局が専ら頼っていた洋銅すなわち日本銅は康熙五四年（一七一五年）の長崎新令により輸入額が減少し、官定の銅買付け價格も康熙五六年には毎斤銀一錢から一錢四分五厘に引上げられている⁽¹⁶⁾（康熙初には六分五厘であった）。國內銅、殊に雲南銅に依據した鑄造體制への移行は必然の趨勢になっていた。

その銅產地たる雲南において鑄錢するのは合理的であり、認められてもいたが、しかし少なくとも雍正の初期までは雲南錢は他省への流出を認められていなかった。清朝は京師二局以外に制錢供給の中心をつくることに躊躇していたのである。それ故、雲南錢に京師局の錢との同質性を敢えては要求していなかった。しかしやがて鄰接する廣西省に對して、恆

常に雲南錢を搬入することによりその貨幣需要をまかなうことを認可しており、さらに雍正一一年には遠隔の陝西省にも供給しはじめ⁽¹⁷⁾る。雲南錢はけつして雲南だけを流通域とするものではなくなってきた。この事は見方を換えると小錢や民間銅の收買とは異なり、まだ錢形態ではあれ、現地外の銅で制錢を供給することの有効性を一方で認めつつあったということである。

清朝は一錢二分への改鑄の僅か六年後の乾隆五年にまた改鑄に踏切っている。とはいっても今度は重量の變更ではなく合金成分を變えたのである。従来は銅と鉛を成分とする黃錢とよばれるものであったが、この時から錫を混ぜる青錢というものになる。これ自体は私鑄を少しでも困難にすることを目的にするものであり技術的な修正にすぎない⁽¹⁸⁾。ここでより着目すべきは改鑄を通じて京師二局と雲南各鑄局の鑄貨成分の畫一化が初めて圖られたことである⁽¹⁹⁾。これは象徴的な意味を含んでいる。この乾隆五年の改鑄の時期までは、四川等を除き地方局は銅の直接買いつけによる鑄造を認められていなかった。つまりは一元的に鑄造權をもつ京師二局の臨時補助の役割を果たすものでしかなかったことだが、同年の福建・浙江・江蘇の鑄造開始を皮きりに、これ以後各地方局は自ら原料を調達し現地の通貨需要に對應していくことになる⁽²⁰⁾。その際、京師二局の錢の式様に合致することが義務づけられている。乾隆五年の改鑄に伴う京師二局と雲南錢の成分統一は、そうした地方局の自律化に際しても統一性を保持するためのガイドラインを示したといえる。

各省の制錢鑄造開始の認可請求に對して當初清朝が不安視したのは、はたして原料ことに銅を安定的に供給することが可能かということであった。四川・廣西のように産銅が見込まれる省では雲南銅で補いつつも自給を目指したが、他の省はほとんど洋銅すなわち日本銅か雲南銅に頼らねばならず、鑄造材料の集散地を抱えた江蘇等を除けば銅確保には不安があった⁽²¹⁾。そのため錢不足がひどかった江西省などは例外的措置として雲南から輸送中の京銅をとどめ原料として鑄造を開始⁽²²⁾することを認めさせている。京師二局の原料銅確保を第一義としてきた従来の政策からすると極めて異例のことである。しかも、清朝はこの措置を先例としないとしながら、その後湖北省などにも認可している⁽²³⁾。

貨幣供給が不安定な場合、このように地方の貨幣需要に合せ現地で通貨を発行するのは一見當然のことのようであるが、貨幣鑄造權を獨占的に有する清朝中央にとってはその貨幣政策の根幹に關わるような困難な問題を内包していたのである。そもそも原料の偏在のもとの貨幣鑄造の分散は、地域ごとの鑄造コストの差異をもたらさざるをえない。殊に銅の場合は運送費による較差が大きい。地方鑄造を認可することとは、そうした較差を處理した上で尙且つ貨幣の統一性を保ちうるかという課題を課せられることであつた。さもないればその貨幣の全國的均質性・統一性を放棄するという手段を講ずるのだが、後で觸れられるように現實にそうした方向も顔を覗かせていたのである。

ともかく地方錢局の自律的な制錢發行の道が開かれたわけであるが、そもその契機が各地方での錢貴の進行であつたことは疑いない。雍正一二年の改鑄は本來錢相場を軟化させるべきなのに、錢貴は一向におさまらなかつた。いやむしろ進行的歩みを速めさせた。更に乾隆帝即位とともに錢貴解決策として雍正の銅禁令を解除するが事態は變わらなかつた。銅禁令の存廢にも、また鑄造銅貨の貶質にもほとんど關わりなく錢貴は進行していった。⁽²⁴⁾ しかもその錢貴はただ全體としての銅貨供給を増加させれば濟むのではなく、地方的な對應が求められるような通貨不足なのであつた。特徴的なのは各省とも錢貴を銅錢需要の擴大によるととらえていることである。けつして銀の方の供給過多による比價の上昇とはみなしていない。⁽²⁵⁾ それ故に清朝は錢使用を制限し、各方面で銀使いへ誘導して銅貨の用途を縮小しようとするが、大勢を變えるだけの實效性を持たなかつた。

では地方的對應とは何を示唆しているのか。ここで参照すべきは乾隆九年に湖北省、⁽²⁷⁾ 二六年に江蘇省で⁽²⁸⁾ 見られた小制錢鑄造問題である。江蘇では一文一錢の、湖北では通行の大制錢の三分の二に過ぎない一文一八分の發行を計畫したのである。理由は明快である。銅錢需要が高まっているにもかかわらず原料銅の供給が不足したからである。兩省は國內流通の二大結節點をかかえている。一定以上の恆常的商品流通總量にはそれに對應した規模の流通手段すなわち貨幣が必要なのはすが、金屬貨幣がその流通を支えている前提の下では、貨幣需給の逼迫に際してとるべき手段は二つしかない。貴金

屬供給か貨幣單位かどちらかに弾力性を持たせることである。清朝の貨幣政策において主流を占めたのは前者の方であった。すなわち貨幣單位をあくまで全國一律にしておいて、官民の貨幣需要にあわせて貴金屬供給を對應させようとする方針である。一方この小制錢鑄造の場合は明らかに後者に屬する。すなわち貨幣需要が一定として銅供給量の變化に貨幣單位純分を對應させようとする發想である。

結局幾度か出た小制錢鑄造案は立消えになるか、實施にうつされても短期間のうちに廢止となっている。湖北の例が示すように小制錢は大錢（一錢二分の制錢）と並行して流通する以上グレシヤムの法則が働き大錢を流通から退出させてしまふからである。既に我々は問題の核心に近づきつつある。この場合大錢は畫一的な全國通貨であるのに對し、小制錢は現地の金屬供給と貨幣需要に適合した地方通貨なのである。湖北の事例は地方通貨による、相對的に過低評價された全國通貨の驅逐を表現している。地方錢局の自律性を認めることは究極的には畫一的貨幣制度の放棄に至るのである。だが清朝はその選擇肢を切捨て、現地の貨幣需給からすると素材價格が高い良貨をひたすら供給する道を選んだのである。

三 制錢流通の構造

ではそもそも制錢はどのような原理で流通していたのであろうか。まず銅錢一般の機能を具體的事例の中から抽出してみよう。

乾隆六・七年から一八年にかけては、最も錢貴が深刻な問題とされた時期であつた。京師では錢貴が昂じて一兩 \equiv 八〇〇文を割ってしまう事態となっている。この時の清朝の原因認識及び對策には特徴がある。すなわち錢の供給量の少なさに求めるのではなく、錢貴の元凶は「富戸」の、また後には鹽商の錢蓄藏であるとしたのである。單なる投機に對する批判の類いであれば通時的に見られるものである。だがこの時の錢貴に對する錢蓄藏原因論は構造的な問題に觸れるものであつた。この時の錢貴とそれに對する政策の推移を追ってみよう。

乾隆一七年山東巡撫の上奏を契機として、清朝は先ず直隸において一定の額を限度としてそれを超過した分を官が收買するという錢の保有制限令を出す。乾隆初年以降、盛んな國內の銅産に支えられてかつてない規模の制錢を鑄造しておりながら一向に止まない錢貴に、貨幣供給を増加させるのではなくて、いわば貨幣の稼働率を上げることにより對處しようとしたのである。この政策は直隸では一應の成果を示す。早くも同年十月には十一縣から計二萬餘串の提出が民間からあったことが上奏されている。州縣に集められた錢は市集に投入されることになっており、ここでは市中の錢相場より低い交換レートを設定して相場の沈靜を圖るようにした。十二月にも通州だけで一萬七九〇串を收買した等、各州縣の收錢額を上奏しているが、興味深いのは各州縣の錢相場が低くなったため地租として集められた錢をより相場が高い京師に運んで兌換する動きがあると報告していることである。實際この上奏では地域によりばらつきがあるが錢相場は八百三四十文から八百六七十文としており、すでに沈靜しつつあるとしていた十月の八百三四十文よりも更に下落している（ただそれが政策の直接の影響か否かは保留しておく）。貨幣相場の地域差には敏感な反應があったらしいことは銘記しておく必要がある。翌一八年三月の上奏では收買錢の二割は綠斑を帶びた康熙・雍正錢であるとして、退藏分が出てきたのであり投機的蓄藏制限の目的は達せられたとの主張をしている。⁽³⁰⁾ともかく施策の有効性はともあれ供出可能な錢は確かに蓄藏されてあったらしい。

直隸での成果をうけて、各省に對して同様の錢蓄藏制限策をはかるよう上諭が下り、約半年の内に十五省がそれについて上奏してくる。共通しているのは、自省の錢蓄藏の弊を否定していることである。それが事實を反映しているか否かは、ここでは不問にする。問題は錢蓄藏がほかのいかなる事象と因果づけられているかである。直隸の錢貴が自省とは異なった事情によるものであるとの認識は多くの外省督撫たちが共有するものであったが、具體的にそのことに言及しているのは山西巡撫の上奏である。それによると直隸は山西と違い穀物生産が豊かであり、富戸にとつては穀物代價として得た錢にさしたる運用先もないので錢が蓄藏されたのだ、としている。⁽³²⁾この内容も現實（例えば直隸の穀物生産力水準）を

正しく反映したものと考えることは恐らく危険であろうし、またここではそれを検討する必要もない。着目すべきは穀物販賣と錢蓄藏に因果關係があるとする官僚たちの認識である。實際、この因果關係については直隸に限られず、例えば福建の内陸部についても同様の指摘がなされている。⁽³³⁾ 他地域への穀物賣却がその地域に錢を滯留させるといふ發想は、少なくとも違和感をもたれなかったのである。

穀物と並び錢蓄藏との因果關係を問われたのが鹽の小賣である。乾隆一八年清朝はなおやまない錢貴への對策として、鹽商に對して生産者からの買付けに必要な部分を除き、その他の餘剩錢は鹽を賣却したその州縣で銀に兌換させるように各省に指針をしめしている。⁽³⁴⁾ 地域から引上げた小額通貨は、直隸の錢保有制限と同じくその州縣の市集で再投入する方針であった。だが生産地から遠距離の消費地を受持つ鹽商にとっては、言われるまでもなく、それはある程度必然のことである。湖南巡撫が報告しているように、湖南省南部は廣東の鹽商の販賣領域であったが、彼等にとつて廣東の鹽場で鹽戸に支拂うのに必要な錢は廣東で調達するので、湖南で得た錢を省外に持出すことはないとしてゐる。⁽³⁵⁾

多額の錢の移動にはすくなく運送費を要する。概して制錢であれ小錢であれ錢相場の地域差にはたしかに敏感に反應して移動するのであるが、一方で運送費を超過するだけの差はそう容易には起こらない。すなわち現送點の上下の幅が廣いというこの構造は、穀物や鹽といった最も日常的な物資の賣却により流入してきた小額通貨の還流性を著しく制約していたのである。

さて「富戸」對象の錢保有制限令にしろ、賣鹽の錢の現地兌換獎勵にしろ、この時の錢價への介入政策は外部からの制錢の追加供給を考えるよりむしろ現地の錢ストックを一定のものと前提し、その中で公的手段を通して退藏分までひきずりだしてその流通速度を高めるといふ調整方法だったのである。そうした追加供給もせず流出を防ぐだけで、回轉を速めることにより、實效があったかどうかは別として、錢貴に對應しようとする姿勢には何らかの根據があったのではなからうか。別の材料を參考に供する必要がある。

やや時代が下るが乾隆三八年安徽巡撫は自省での小錢の流通について觸れる中で「各處の舖戶（商店）は節（金融節期）に逢うごとに收支の勘定において銀建てが少なく錢建てが多いため、外來の商人が小錢を機に乗じて混入させるかもしれない」としている。⁽³⁶⁾ 小錢の流通に關する史料としても意味があるがそれは後で觸れるとして、重要なのは決算期になると錢需要が高まるという指摘である。金融節期とはすなわち五・八月と年末であるが殊に年末に錢相場が高騰するということはどこでも共通していた。⁽³⁷⁾ そのため特別な對策が必要な問題として意識はされていたようで、直隸の兵餉の錢支拂なども冬季を選んでなされている。

一方でまた散見するのは徵稅と錢價變動の關連である。すなわち徵稅前には銀需給が逼迫して錢相場が弱氣になり、納稅期が過ぎると回復するという別の周期の動きが存在していた。そうすると錢需要にはかなりの季節較差があったことになる。しかも較差分に當たる錢が地域外へ流出するほどの錢相場の地域差は通常では考えにくい。既に舉げた直隸の綠斑を帶びた錢の例のように完全な死藏とみなされていた部分を除いても、錢需要の周期の山場以外のある時期をとればかなりの「流通」していない錢が存在していたはずなのである。いいかえれば國家により鑄造發行された貨幣（錢）の總流通量と市場で現實に機能している貨幣の純流通量との間に大きな差があったと考えられるということである。

貨幣を追加供給するのではなく地域内の調整で錢需要を充足させるという政策は右に述べた錢需要の季節性という現實と符合する。實際さまざまな階層がそれぞれに支拂いしないしは送金の義務を負っていたのであるが、それらは例えば納稅のように一年の内のある特定の比較的短い期間のうちに履行されるべきものであった。そうした貨幣需要の繁簡は、そのことにおいては銀・錢とも程度の差はあれ事情はおなじであるが、一方で退藏通貨を構造的にうみだすと同時に、何らかの信用機關が介在する條件となる。先の各省の上奏において、多くの省が蓄錢の最たるものとして典當を擧げているが、それはそれなりの現實を反映していたと考へて良い。既に言われているように清代中期に隆盛を迎えた典當が、兩替を業とする錢舖と共に地域の遊休銅錢のプールとしての機能をはたしていたのである。ただ遊休銅錢の主要部分がそれらの信

用機關に集められ運用される構造を想定するのはやや無理がある。多くは運用されることなく、周期的にやってくる需要期以外は退藏されていたが故に、鹽商でも典當でもない一般的な「富戸」の蓄錢が論じられたのであろう。

さてそうするとどういふことになるのか。銅錢はその重さのために、運送費を越えるだけの地域間の錢相場の乖離は本來おこりづらく、ある範圍内に沈澱する傾向を持つ。また現實に存在する錢と機能している錢とは量的な差があり、しかもその差に當たる部分が必ずしも錢相場の上昇に連動して流通部面に再登場することにはならない。それ故に先の安徽の史料に言うごとく、貨幣（錢）市場が硬化した時こそ非公式通貨たる小錢の需要が増す時であった。その條件に應じて採算のとれる質・重量の小錢であれば別地域からも流入しうる。⁽⁴⁰⁾もちろん清初から中期にかけてのように、ただ錢供給全體が相對的に不足しているというだけで小錢はその活躍の場を得るのであるが、既に錢が充溢していても小錢は受容されたのである。故に小錢の通用性が各地域で確立してしまうのをあくまで拒否して、通貨の專一の發行主體である清朝が銅錢の畫一性を保とうとするならば、それぞれの錢相場高騰に對して外部から彈力的に制錢を供給してやらなければならぬということになる。

かなりの商取引が現物の小額通貨でおこなわれるにもかかわらず、その純流通量が小さいということは、周期的な需給逼迫とは別の短期的な銅錢需要が生じた場合には相當な混亂をもたらすことになる。最も急激に制錢需要を高めたのは軍事行動である。例えば乾隆十九年のジュンガル派兵に際しては前線に連なる地方のみならず、途中經路の河南省などにも制錢の追加供給のための措置をはかっている。⁽⁴¹⁾また乾隆帝の南巡は有名であるが、やはりその度毎に江蘇・浙江は制錢を臨時に増鑄している。⁽⁴²⁾すなわち非日常的な人的移動が豫想される時には國家が直接その移動先に通貨を投入せねばならなかった。それは軍事・巡幸のごとき大規模なものばかりでなく、例えば郷試のような水準の人の集中でも錢需要の逼迫が豫想されている。⁽⁴³⁾

人の移動・集中だけではなく、農作物の豐凶も錢需要の逼迫に繋がった。凶作が昂じて飢饉に至りその救済を講ずる

時、現地で銀を錢に兌換して、供與する爲の穀物を購入するのでは現地の錢相場を急騰させるので、豫め兌換した錢を支出するといった配慮をしている。⁽⁴⁴⁾ 以上に舉げた例は非經濟的要因すなわち政策が惹起した實物需要が介在しているものである。それとは別に、ただ單にある地方が豐作になったというだけで錢相場の高騰はおこりえた。⁽⁴⁵⁾ つまり實物の需要増加に對してのみならず、實物の供給増加に對しても貨幣(錢)相場は正の關係にあつたのである。いずれにしろ結果として商品流通量が通常の枠を越えたならば、銅錢は追加供給されねばならなかった。

では公式上は唯一の供給者である清朝の國家業務の遂行においては、制錢はどのように流通していたのであろうか。史料に據るかぎり國庫に制錢が納入されるのは主要には二つの場合に限られている。一つには當然納税が擧げられる。もう一つには國家が穀物價格調整のために米などを廉賣(糶米)した時の代價として入ってくる。對して國庫から制錢が支出されるのはほぼ二つである。一つには兵餉・官俸の支拂い、もう一つは種々の物資の國家による買付け、すなわち採買の代價として支拂われる。人件費の支拂いは兵餉搭放のようにその時の錢相場を考慮して一定の割合の制錢支拂いを組込んでゐる。京師二局並びに各省錢局が毎年新たに鑄造する制錢の大部分はこれに充てられる。ただ最終的には銀支拂い部分もかなりの割合で錢に兌換されたと考えたほうがよい。⁽⁴⁶⁾ 一方、採買においては省以上の機關から制錢を支出することはずない。ほとんどは採買する現地で錢鋪などの金融業者を通じて銀を兌換して調達するのであつた。故にたまたま現地の錢鋪の錢保有が不足氣味であつた場合はその執行が遅らされることにもなつた。⁽⁴⁷⁾

歳入の錢はどうか。清初より州縣への田賦納入は銀七錢三の割合でなすことを成例としたが、それはあくまで州縣の殘留分に限定したものであり、省への起解分は全て庫平銀に直して送金せねばならなかつた。そもそも銀七錢三の例自體は國庫通用性を付與することにより、一方で國家側の支拂い手段でもある制錢の信用を高めようとするものであつたが、州縣より上級で錢のプールを形成する制度にはなっていない。⁽⁴⁸⁾ 糶米の錢は地方と京師は別に見なした方がよい。地方では糶米錢は銀に兌換の上、收穫期に常平倉の補填費用に供される。⁽⁴⁹⁾ 京師では穀物價格調整を司る五城米局が戸部を通すなどし

て兵餉や土木費用（工程）に錢のまま運用される。⁽⁵⁰⁾

さてそうすると五城米局の糶米錢は兵餉等の搭放分となって還流しているが、納官された錢のほとんどは國庫より支出される制錢とは重ならないということになる。兵餉などのための毎年の新制錢を供給する以外、銅錢は國家にとつてもやはり州縣以下で循環するだけのものだった。そのため業務の上から見ても、行政機關での銅錢保有額は低かったといえる（勿論錢局は別だ）。州縣の等級でなら存留分のある部分は銅錢であつたろうが、省の等級までいくと、宮中檔に散見する各布政司の存款（殘高）では錢款目がそもそもないか、⁽⁵¹⁾勿論錢勘定分も折銀しているという可能性は常にあるのだが、あつても非經常的なものでしかも全體の數パーセントの割合である。京師すなわち清朝中央ではどうか。王慶雲が集めた乾隆三〇年における京師での經費報告を見ると銀兩建てが約八三〇萬兩に對して錢建てが約一二〇萬串となっている。だがその錢款目は兵餉と京官公費飯食錢が主要な部分を占めており、それらはほとんど寶泉局の鑄造錢（すなわちまだ流通に投じられていない制錢）が支拂われたものと考えてよい。⁽⁵²⁾國家業務の遂行においても上から下へ制錢はただ沈澱していくのみであつた。

國家業務の遂行において制錢がただ沈澱するものとして位置づけられていたことは、一方的追加供給を求める現實の貨幣流通と適合するがごときである。だが國家の制錢支給は市場の狀況と直接的な關係を持たずになされるものであつた。當初清朝にとって通貨政策は兵餉の搭放を主眼とするものであつた。乾隆初期各省が鑄造を開始した時も兵餉搭放に足りることを基本にしてその鑄錢數を設定している。そもそも兵餉への制錢搭放には一種の優遇策としての意味があつた。銀建ての兵餉を制錢に換算するのに順治以來の一兩 \equiv 一〇〇〇文のレートを採用していたのである。錢貴であればあるだけ受取る側には有利となる。當然それは清朝に財政負擔を強いることになった。そのため乾隆八年には江蘇省が兵餉搭放について鑄錢數が足りないので一兩一〇〇〇文を改めて市價に近い八八〇文で支給する案を提出する。對する上諭は、兵丁の給料は食用に足りるだけであつて削減すべきではない、として舊來の率を遵守させ、他省にもこれを基準とさせている。⁽⁵³⁾

毎兩一〇〇〇文支給の原則はその後崩れていくが、ともかく各省の制錢鑄造開始の頃の制錢供給は市場の錢相場とは直接的な因果關係を持たず、國家が義務を負っている支拂いの維持を第一義としてなされたのであった。

一般に實錄等で制錢ないしは大錢と明記しているのは、納税（正税に加えて、派捐のような臨時課税も含む）や兵餉の支拂いに關する記事であることが多い。⁽⁵⁴⁾つまり制錢が國庫通用性を排他的に有する通貨であるという幣制上の原則を反映しているのである。對して小錢はあくまで非公式通貨であり、例えば小錢を使用したということをもって十分刑罰對象たりえたのである。⁽⁵⁵⁾清朝にとっては、國庫通用性を有する制錢を自らの財政支出を通して上から供給することにより地方通貨たる小錢が通用するのを排除しようというのが方針だったのである。

論理的には公式通貨たる制錢の流通を前提にしてこそ差益を得るための私鑄錢が成り立つのであるが、現實ではむしろ小錢の地方での流通の方が前提となつて制錢の追加供給による排除という對策が生じたといった方がよい。その役割を果たすには制錢はどの私鑄錢よりも良質でなければならなかつた。しかしまさしく良質ゆえに微妙な問題が附隨せざるをえなかつた。すなわち良質たるがための私銷の弊である。私銷には小錢の製造を目的にするものと銅器の原料に供すものがあるが、清代は非常に銅器そのものの需要がたかまつた時代であり、制錢を原料とする銅製品製造は大きな利益を生むものとみなされていたことは既に言われている。⁽⁵⁶⁾銅自體の賣手優位の狀況は銅の市場價格を高め、制錢の素材價格を相對的に低めることになつた。

だが銅の市場價格が高かつたのには供給の在り方にも原因がある。膨大な制錢の鑄造を圖るには貴金屬でもある銅の生産と流通を確保せねばならない。洋銅すなわち日本銅の輸入減少が銅の市場價格を吊上げたのは確かな事である。だが制錢の素材價格の市價と比べての低さは別の要因による。すなわちそれは雲南などの國內銅の官買上げ價格の低さがあればこそであつた。とはいってもそもそも年間一〇〇〇萬斤以上の銅を繼續して生産するには當時としては莫大な投資を要した。若干の燃料費等を除けばほとんど勞働力確保のための出費であるが、「僻遠の地」であるため米・鹽といった基本

的物資の調達にまで國家が配慮せねばならなかった。そのため少なくとも絶對的な生産コストを無視した買上げ價格が設定される事はなかつた。⁽⁵⁷⁾ 鑄造側においても基本的に生産費は補填されていた。とすると何故制錢の素材價格が名目價格を上回ることになったのであろうか。問題なのは官による買上げ價格と銅の市場價格の相對的關係である。

國內銅の買上げの在り方は省により異なり一律ではないが、產出銅の一定額を税として控除して、残りを買上げ價格を設定して官が收買していたのは共通している。⁽⁵⁸⁾ だが銅商人にとっては官定の價格を受取るだけではさほどの利益にならないとされ、一〇%の「通商」⁽⁶⁰⁾ すなわち自由販賣をゆるすことになる。また洋銅は大方官による收買と銅商の自由販賣を半々の割合で定めていた。⁽⁶⁰⁾ よって公式上において少なくとも雲南銅の一割と洋銅の五割は官の收買から除外されており、それらが銅の市場を形成することになる（實際にはより多くの統制外の銅が參加していたであらう）。鑄造用の銅の供給が不安定になると、各省とも必ず商銅つまり民間市場の銅を收買して急場をしのごうという議論が現れる。湖北省の場合など、恆常的に寶武局の原料銅の三分の一を漢銅すなわち漢鎮（漢口）⁽⁶¹⁾ の商銅から收買することにしていたが、漢銅價格は洋銅價格をも越え國內銅價格とはかなりの價格差をみせている。無論雲南銅の官收買部分の率を減すれば全體として銅相場も軟化するはずであった。つまり國內銅の國家統制があるために幅の大きい二重相場が生じ、またそれ故に統制的コスト體系に基づいた制錢から市場原理に左右される銅への融解という傾向が生じたのである。

もし小錢とおなじ素材價格の水準で制錢を供給していたならば（論理的にはいくら貯蓄させても私鑄はありえるはずだが、現實には貨幣需給に自ずとその下限が規定されるはずである）、事實上の自由鑄造となったであらうが、制錢を自らの支拂い手段としていた清朝はそれを拒否していた。一方で錢需要は高まりつつある。それに對應するため銅を獨占的に管理しながら、大量の制錢を供給したのであるが、そのものが商品である銅の市場供給を犠牲にしていたため、絶えず溶解されながら多大な經費を投じて供給していくという甚だ矛盾した構圖となったのである。

四 制錢流通の崩壊

各省が鑄錢をはじめたといつても、その鑄錢數が兵餉支給を基準にしていたのでは、自ずとそれぞれの本來の錢需要との均衡は難しかった。なにしろ江蘇省の正規の年間鑄錢數は僅か九萬五三三〇餘串であり、廣西省のそれと殆ど變わらなかったのである。しかし乾隆一七年の錢貴の邊りを境にして狀況は變わりはじめる。湖北省の場合のもと銅四十萬斤分のみを正規の鑄錢に充てていたのだが、漢口の錢相場沈靜を名目としてさらに四十萬斤を追加鑄造しはじめる⁽⁶²⁾。貨幣相場への介入を目的に制錢を供給する時は市中の相場よりは安い⁽⁶³⁾（山西省の例にならつて錢一串當り銀五分安とすることが多かった）が、しかしそれでも鑄造コストよりは高く、各省に差益をもたらしことになった。

その差益はそれぞれ臨時財源として主に土木・建設事業に充てられるのだが、やがてそれが目的となつて増鑄するといふ傾向が現れる。湖北省は護岸工事のため布政司から支出した二萬五千兩を補填するために、五萬兩を借りて寶武局に乾隆一七年から一九年にかけて増鑄させ、その賣却差益でもつて完済している。そうすると次には荊州の城壁修理などの名目を掲げまた増鑄させる⁽⁶⁴⁾。かくして本來臨時のものであつた増鑄が恆常化していった。

乾隆二〇年頃からはこうした地方公費財源の捻出策としての鑄錢數増加が目立つてくる。各省にとつてみれば、條件の良い財源であつた。豫想される支出規模にあわせて増減が可能であるし、何よりも投下した元金の回收が早いのが特長であつた。そのため他の財源を切捨てて制錢鑄造に回す事例もでくる。乾隆三〇年四川省では元本の還元が遅いため生息銀（質貸利息）に充てていた四萬兩を引上げて寶川局の増鑄費用に轉ずる。新たに鑄造するためには銅の確保が必要であるが、官銅の確保が不可能な場合はコストの高い商銅を購入しても質貸より大きな利益が見込まれるとしていた⁽⁶⁵⁾。そこからもわかるように、依然として續く錢貴がこれらの増鑄の前提にあつたのである。

各省錢局の増鑄には當然銅供給の増加が伴わなければならない。乾隆二〇年前後から三〇年頃にかけてはまさしく雲南

とそして四川の銅生産が波はあるが全體として擴張した時期であつた。雲南では湯丹・大礫の主要二廠に加えて中小の銅廠の生産が増し三〇年代前半には年産額一五百萬斤にも及ぼうとしていた。⁽⁶⁶⁾つまり各地での錢の相對的不足と當時の技術水準での鑛山開發のピークという二つの條件が合致して地方局の制錢鑄造は増加していったのである。だがそこには非常に不安定な要素が隠されていた。既に述べたように制錢は幣制の畫一性維持のために上から下へ追加的に供給されねばならない。それだけでも一定量の銅の確保が必要である。かつ一旦擴大した各省の制錢鑄造規模は容易に縮小できるものではない。もし原料銅の供給に翳りがみえてきたならば、畫一的幣制にすぐにも龜裂が生じかねないのである。

問題は既に乾隆二〇年代の末から起こっていた。この頃から低銅すなわち純分の低い(鉛などの異物を含む)銅が史料の上に現れてくる。例えば陝西省は二九年末に、それまで供給を仰いできた四川銅が減少してきたことから雲南銅への轉換をはかるが、純分の高い高銅では缺損が生じるので安い低銅を混入することを上奏している。⁽⁶⁷⁾この時には湖北・江西も高銅・低銅の配鑄に既にふみきっている。残されている史料上の數値においては雲南銅産はなお上昇局面にあつたが、實際には、高い水準に固定してしまつた銅需要に應えるために劣質な鑛脈にまで開發の手を伸ばさざるをえなくなつていたのである。洋銅も減少傾向にあり、⁽⁶⁸⁾またやがて雲南銅も擴大の頂點をすぎ減少に向かうとますます低銅問題は深刻になつてくる。

銅産効率の惡化はまず銅産地域での銅錢流通を次第に無秩序なものに導いていく。舊來の銅鑛の疲弊は自然新たな鑛脈を求めさせるが、それらはどれもより交通の便が悪く従つて穀物等の必需品の搬入に多大な出費を強いることになる。⁽⁶⁹⁾また生産獎勵の目的からもとと低かつた銅の收買價格引上げの要求に次第に應じていったのだが、⁽⁷⁰⁾そもそも銅の收買は相當な財政支出を必要とした。元來、京銅の經費だけで清朝は百萬兩を投じていたのだが、⁽⁷¹⁾假にそれ以外に八百萬斤として、一五%税控除の残りを當初の價格の毎百斤九・二兩で買上げるとしても六〇萬兩強が必要となる。一方雲南の地丁銀は五〇萬兩程度なのであるからその規模の大きさが知れよう。⁽⁷²⁾問題はその引上げ分をどこから引出すかであつた。増産當

初からそうであったが、結局増産した銅でもって現地の鑄錢數を増加させ、その鑄造差益を銅收買價格に充てるという方法を採用するしかなかった。⁽⁷³⁾だがそれは從來から非銅產地に比べて低かった銅產地の錢相場を益々低下させることになる。

しかも銅産はけつしてその最盛期に回復することはなかった。四川の場合でも、乾隆四十七年の上奏では、かつては寶川局は六萬兩餘りの鑄造差益があつたのが銅産の減少で鑄爐を減らしたとしてゐる。⁽⁷⁴⁾甚だしきは、貴州のように乾隆五一年に四六年分を鑄造してゐるような状況になる。⁽⁷⁵⁾收買代價としての錢支拂いは窮地に陥る。またそもそも相次ぐ増鑄は鑄造差益の根據を自ら切崩すものであつた。その上で收買價格を維持しようとする、最終的な手段、すなわち官自身による小錢の發行という方法を用いることになった。⁽⁷⁶⁾遅くとも乾隆四五年には雲南の制錢が京師二局のそれより輕質であることが上諭の中で言及されてゐる。⁽⁷⁶⁾二章で述べた乾隆五年の規格統一はもはや有名無實であつた。

かくして制錢流通の畫一性は崩れはじめ、非産銅地でも低銅問題はその混入比率を省ごとに不揃いなものにさせ、しかも一旦混入を認めると、以後統一を圖るにはより貶質なものを標準とすることになる。やや下つて乾隆五四年陝西省はたまたま低銅が不足し、それまでの高銅七低銅三の比率によらず、實陝局に蓄積のある高銅だけで鑄錢しようとするが、私銷の弊害が生じるのを恐れて、鉛の配分を高める條件で許可されてゐるのである。⁽⁷⁷⁾京師二局の制錢鑄造は優先的な銅供給（京銅）で支えられていたのだが、乾隆四四年にはその京銅まで遅延ぎみになり、さらにはやはりこれも各省鑄錢局と同様に原料銅の劣質化に悩まされることになる。⁽⁷⁸⁾

何よりも深刻な問題は官自らの小錢鑄造が私鑄錢の横行を誘發したことである。乾隆の末年にはまた小錢の收買が各省で行われるが、數十萬斤の收買額を數える省も少なくなく、四川などは一千萬斤という信じがたい數値を上奏してきてゐる。⁽⁷⁹⁾湖北省荊州より上流の地域、四川・雲南・貴州では官小錢・私鑄錢あいみだれて他地域とは全く異つた錢流通圈が出現する。⁽⁸⁰⁾同時に制錢の畫一的流通を支えてきた銅統制も既に揺らいでいた。雲南などでは官の不正もからんで銅の密移出が問題となつてきていた。⁽⁸¹⁾そうした銅の「地下」流通もまた小錢横行の條件の一つになつたと考えてよからう。

さて以上では銅生産の變化を原因とする問題を検討したが、銅錢そのものの需給均衡の變化についても觸れなければならない。乾隆前期の錢貴は各省に鑄造差益をもたらし、兵餉搭放分を越える新規鑄造錢は市中の錢相場沈靜のため銀と交換される（平減出易錢）ことにより償却していた。ところが乾隆三〇年を過ぎる邊りからそれらの錢が錢局に滞留しはじめる。そもそも錢相場が沈靜の方向に向かつており、制錢を投下して貨幣市場に介入する根據が無くなつてしまつたからである。⁽⁸²⁾四〇年代なかばには官側が銀錢比價を設定するのでも一兩〓九五〇文前後にすることが多かつた。四三年の江西省では九九〇文という官價を設定している。⁽⁸³⁾もともと錢を市中に投下する際、會計的には統一的に一兩〓一〇〇〇文を基準としてそれより錢貴である分を差益として計上していたのであるから、もはや會計上の差益が存在しない水準にまで錢相場は下落したのである。また實際の制錢鑄造の生産費からみても、例えば浙江省では乾隆一九年の時點で制錢一〇〇〇文の生産費を銀一・〇七三九兩としていたのだから、割高の洋銅を混入せざるをえなかつた地域ではその後貶質を認めなければ、採算割れすらおこりえたのである。⁽⁸⁴⁾ただそれでも民間の銅器の相場を基準に換算すればなお制錢は私銷の對象たりうる良貨であつたろうが。

興味深いのは以前の錢貴の時にうちだした対策、例えば京師に官局を設けて錢の投機的蓄藏を取締まるなどが、その後（⁸⁵）の錢價下落とは無關係であるということ清朝側も認識していたことである。現存の銅錢の回轉を速くするという方式の方はさほど錢相場沈靜のための効果がなかつたのである。やはり當初の正規の額を越えて各省の増鑄を認めたことによる貨幣供給の増大こそが乾隆前期の銅錢需給の逼迫を押えこんでしまつたのであつた。そしてかつて錢貴の下では錢の兌換をひきうけていた京師の鋪戶（かれらのそうした商行爲が清朝の錢相場介入を成り立たせていたと考えるべきだが）⁽⁸⁶⁾なども、ややもすれば錢の受取を敬遠するようになる。

さてそうすると乾隆後期の錢價下落は二つの要因の複合であつたことになる。第一には、還流する事のない制錢のあいづ追加供給が各地での銅錢のストックを需要に對して飽和狀態にさせたということである。一方で各省は増加鑄

造を認めさせた分の制錢の用途に苦慮しながらも即座には減鑄しなかった。一度膨脹させた「財政支出」規模の下方硬直性の強さをみてとることができる。第二には、銅生産の効率悪化が、制錢供給の壓縮に直接に繋がらなかったため、むしろ銅産地での制錢を貶質させ、しかも私鑄の横行を並行させたということである。産銅地で造られ現地では用途に乏しかった小錢が、その輕質さも手傳つて非産銅地に流入していったことはおそらく間違いない。⁽⁸⁷⁾

第一の要因についての對策は各省錢局の鑄爐を減少させれば良いのであるからまだ比較的容易である。實際いよいよ銅の安定供給を確保できなくなると邊境諸省から鑄爐を閉鎖させている。だが第二の小錢の流通の制限はもはや容易ではない。既に銅の生産・流通に對する統制體制は崩れだしている。乾隆前期の錢貴下における小錢對策の如く、良貨たる制錢を供給することにより排除するということはできなくなっていた。従つて乾隆末年の小錢對策は専ら小錢收買であつた。その結果各省から既述のごとく多大な數値の上奏がなされたのである。

だがこの時期の小錢收買は錢貴の時のそれとは性格を異にする。雍正の收買がほぼ銀を代價としていた（貴重な銅資源とみなしていたということでもあるが）⁽⁸⁸⁾のに對して乾隆末年のそれは基本的に制錢であつた。⁽⁸⁹⁾しかも代價すら與えずに回收するという非現實的な方針さえだされている。それは半世紀を隔てた二つの時期で、貨幣流通全體における小錢の占める位置が變化したことを示している。すなわち錢の相對的不足という條件での小錢はあくまで制錢流通に附隨した形で、つまり通貨當局が對應できない微妙な貨幣需要の變化に即應して利をえるものであつた。對して乾隆末年の小錢は大量の事實上の官小錢を含み、非公式通貨でありながら、もはやむしろ主要な流通手段となつてしまつたのである。

乾隆末年から嘉慶初にかけて錢價は下落の速度を速めるが、浙江では代わつて同じ計數貨幣である銀元がその相場を上昇させている。それはとりもなおさず、制錢の畫一的流通が崩れたことが銅錢一般の信用を低落させ、銀元建てへの傾斜を強めたということを表していた。⁽⁹⁰⁾その後嘉慶五・六年に錢相場は乾隆四〇年代の水準に回歸したのであるが、しかし状況はすでに不可逆的に進行してしまつていた。次の嘉慶六年についての記述は事態を如實に語ってくれている。

庫紋、制錢九百文に直すること二十年前と略同じ。惟だ市肆の制錢のみ稀少なれば、九十四文毎に足錢百文と作す。

名づけて大錢と曰うも仍お私錢三四十文を攬⁽⁹¹⁾えり。

つまり銀錢比價は回歸しても制錢の畫一的流通は戻らなかったのである。

さてこの章を終えるにあたって、これまで敢えて觸れなかった問題について言及しておきたい。一つは銀の問題である。まず考えねばならないのは貿易に伴う海外との銀收支の問題だが、これについては依據しうるにたる材料がない。少なくとも一八世紀前半の錢貴と後半の錢賤がそれぞれ貿易による銀の流入と流出により引起こされたという可能性は考えなくてもよいように思える。考慮すべきは戸部の銀保有高の變動との關連である。實は殘⁽⁹²⁾されている乾隆三九年までの戸部の銀保有高と錢相場の動きは、乾隆年間に關しては、おおよその傾向は一致するのである。兩者の間には何らかの因果關係がうかがわれる。しかし乾隆四〇年頃までなら錢相場は雲南の銅產額の動きとも對應しており、單純に戸部銀保有高の方だけに一元的に原因を求めて、清朝の銀引上が錢賤をもたらしたと考えるわけにはいかない。

ただ嘉慶五・六年頃の錢相場の反轉について、白蓮教反亂の鎮壓のため銀が支出されたことによるのではないかとの意識は當時あつたようである。⁽⁹³⁾しかし既述したごとく軍事支出と錢需要は密接な關係をもつのである。故にこの場合も巨大な軍事支出による錢需給逼迫という側面も考慮しなければならない。どちらにしても財政支出の在り方との關連が問われねばならないが、本論では保留にしておくしかない。その問題は何故こうまでして通貨の畫一性を求めなければならないのかという、本論から必然的に生じる問（それは決して貨幣流通に内在する論理だけでは説明できない）にも關わるであろう。

もう一つは物價との關連である。これまでも指摘されているように乾隆四〇年頃からの錢建物價高騰が銅錢流通の變化すなわち錢賤によるものであることは、⁽⁹⁴⁾本論からも確認できる。ただ物價騰貴は錢貴の時にも言われていた。その場合問題とされていたのは銀建價格である。⁽⁹⁵⁾錢建で收買されることの多い穀物の場合など、錢貴の進行は銀建價格に轉嫁されざるをえなかったのであろう。つまり銀錢並行本位制の下では、貨幣相場がどちらかに偏向した場合、より高い價格表示を

選ぶ傾向があったということである。それは既に指摘されている乾隆前期には銀表示で、乾隆後期には錢表示で物價が記されているという事實と合致する。⁽⁹⁶⁾ 恐らくこのことは、三章でふれた現象、すなわち凶作が農作物相場を吊上げるのは日常茶飯事なのだけでも、逆に豐作は農作物價格をおし上げるよりもむしろ貨幣（錢）相場を硬化させるといふ、二〇世紀初期においてもなおみられる傾向とも關連すると思われる。自給部分に對して販賣部分が規定的なものになっていないという條件の下では、小農は不利な相場を受入れる必要はなかったし、また小仲買商としてもそれでも賣買差益は確保できたということなのであらう。

五 結びにかえて

さてこれまで述べた如く國家業務においては銀と錢は上下に分業させられていた。では錢を銀にリンクさせて固定相場を設定することはできなかったのか。

三章で述べた一五省の上奏は當時の貨幣流通の地域差を知りうる好史料でもあるが、それによると、數百吊の不動産賣買まで錢建で行っていた直隸・河南と、銀使いの東南沿岸部殊に「分厘」まで銀建であつたという江蘇省揚州・通州が好對照をなし、⁽⁹⁷⁾ 残りはそれぞれある額を境に銀錢が使いわけられていたようである。そうすると高額・小額ということに關しては、銀と錢には互換不可能なまでの機能上の分業はなかつたのであり、銀經濟と錢經濟は別々の貨幣體系を形成しえた上で互換性を保っていたのにすぎないのである。そうした銀使いと錢使いが水平的に交差する關係は、銀の流入経路や銀の使用頻度などに合せて歴史的に徐々に形成されていったものであらう。この條件の下では、もし官定の銀錢比價を強制したとしても、別の事實上の變動相場が生じることは避けようがない。その場合官價より錢貴であれば銀が、銀貴であれば錢が市場から退出させられることになる。かかる狀況は既存の貨幣流通に大きな混亂をもたらさざるを得なかつたであらう。しかしまた銀錢比價の大きな變動は社會的富の移動にかかわるし、何よりも財政收支を不安定にするので、制御

が必要とされるが、それは非常な困難を伴った。

この時期では、一般に貨幣相場の變動が供給側の要因によるか需要側の要因によるかは判別が困難であるが、少なくとも明代とは桁違いの制錢をのみこんでいるのであるから、乾隆前期を頂點とする清代前半の錢貴状態は、恐らく小額通貨の社會的需要に對する相對的不足を意味するものと思われる。その際清朝は銀と錢の機能を分離させて、錢の上級行財政機關への還流の過程を消去してしまい（明並びに順治では錢建通貨としての鈔が一應還流することになるが）、その上で大量の錢という日常的小額通貨を投下しつづけたのである。通貨當局たる清朝はより多くの通貨を求める經濟過程全體の上昇局面に合せた通貨の供給を圖らねばならないが、同時に二つの貨幣の間の均衡をも保たねばならなかった。銀は海外から流入してくるものであり、均質な「價值」を持つものとして受容されるが（しかも一八世紀には清初の遷界令や嘉慶末からの大幅な貿易收支の「入超」というような銀の蓄積に大きな變動を與えるような要因はなかったと思われる）、錢はその原料銅の供給元がそもそも多様であり、しかもその輸送費が生産費用に比して高いため全國一律にその「價值」の畫一をはかるのは至難のことなのであった。

清朝は統一的通貨たる良貨、制錢を國庫通用性をテコにして各省で大量に一方通行で投下し、地方通貨として機能していた小錢を排除しようとする。制錢の追加供給は錢不足を解消していくが、一度規模を擴大させた貨幣供給は、やがて訪れる需要自體の充足並びに原料供給の減少に即應することができず、畫一的流通は崩れていく。清朝による制錢の畫一的流通政策は自己の過重に耐えかねて瓦解したのである。道光の末には順治・康熙は言うまでもなく、あれほど投下した雍正・乾隆錢もはや私銷にふされて稀見に屬するようになったという。⁽⁹⁹⁾ 制錢流通の崩壊とほぼ時期を同じくして、錢鋪の振出す信用貨幣、錢票が土地賣買の媒介を含め一般的に使用されはじめる。⁽¹⁰⁰⁾ かかる債權の社會化、並びに非公式通貨たる小錢流通の盛行は、國家の貨幣市場への介入を既に不要にしようとしていた。中國國家が再び實效ある貨幣市場への介入を始めるのは、一九世紀末から二〇世紀にかけての時期まで待たねばならないが、それは世界市場への對應という側面を持

つものであり、登場する貨幣も制錢とは別の原理によるものであった。⁽¹⁰¹⁾

清代貨幣史を彩る制錢と小錢の對抗は、いいかえれば非市場原理より出自した統一通貨と市場原理より出た地方通貨とのせめぎあいの過程であった。前者は後者を吸収しようとしたが、結局後者の中に溶解してしまい、制錢はその最後の歴史的役割を終えたのである。

註

(1) 彭澤益『鴉片戰後十年間銀貴錢賤波動下の中國經濟與階級關係』『歴史研究』一九六一—六。同「一八五三—一八六八年の中國通貨膨脹」『中國社會科學研究院經濟研究所集刊』一。後『十九世紀後半期の中國財政與經濟』一九八三年。

(2) ほとんどの研究が銀錢比價を銀銅比價に置換えて、それに疑念をはさむことをしていない。勿論兩者は密接な關係を有するのだが、一方の銀が貴金屬商品そのものであるのに對し、錢はあくまで鑄貨であつて、しかもその成分は可變的であるということに充分な留意がなされなければならない。小竹文夫『清代における銀・錢比價の變動』(『近世支那經濟史研究』一九四二年)は銀錢比價を銀と銅の比價で説明しようとした初期の研究である。曾我部重太郎『清初における銅の研究』、同『清代銅史概説』は詳細に錢の生産と流通を敘述したものでありながら、題名に示されているように銅の生産と流通の一部として把握されている。

(3) 錢の需給を銅の需給と辨別していないため、往々にして雲南銅供給不足→錢相場高騰という説明に止まってしまつてい

る。例えば、市古尚三「清朝貨幣史考——清朝の康熙—乾隆期における日本銅の輸出制限と銀・錢比價の變動」『拓殖大學論集』八七。

(4) 貨幣を歴史的に分析する時、貨幣がそれ自身「價值」の定在であるという觀點に囚われるべきではないということはポランニー(玉野井芳郎・栗本愼一郎譯『人間の經濟』一九八〇年)などが提起していることであるが、J・R・ヒックスも中國の貨幣について「價值保存」機能を通して支拂い手段となつたものとみなしている(新保博譯『經濟史の理論』一九七〇年)。そもそも「君主による貨幣鑄造」が「現代に至るまで、小取引のための交換手段だけに限られて」いることが極めて特異なことであるということはM・ウェーバーなども意識していた(世良晃志郎譯『支配の社會學Ⅱ』一九六二年)。

(5) 佐々木正哉「阿片戰爭以前の通貨問題」(『東方學』八)は「制錢の流通價格」が「對國家信用の強弱によつてもかなり左右される」と指摘しているが、制錢の機能まで分析しな

つたため、錢貴から錢賤への推移を、良質貨幣の流通を維持できず私鑄錢の横行を許した清朝の弱體化という一般論で説明するのにとどまった。

- (6) またそれは中國史全體を通じて見られる現象のようである。清代の制錢については佐伯富「清代雍正朝における通貨問題」(『東洋史研究』一八一三)がそのことに觸れている。なお同論文で指摘された諸點を繼承しつつ、動態的かつ構造的にとらえなおすのが本稿のねらいでもある。同論文が依據した『雍正硃批諭旨』・『皇朝文獻通考』に記載されている事については殊更に注記しなかった部分が多い。

- (7) 『皇朝文獻通考』錢幣考一・二。

- (8) 『大清高宗純皇帝實錄』(以下『高宗實錄』)乾隆九年五月辛丑、戶部議准。

- (9) 江西をとってみれば次のとき状態である。

臣受任江西、見民間所用錢文、俱輕薄低小。每市錢一千值銀五錢二三分不等。而每千中模糊破損不堪上串者、十居其四。竟辨其爲官鑄私鑄、亦不知始自何年來於何處、遂至公然攙雜。

『宮中檔雍正朝奏摺』第九輯、雍正五年十月十八日、江西巡撫布蘭奏。

- (10) 雍正五年甘肅巡撫石文焯は銀二萬兩を投じて小錢を收買し、それを大錢に改鑄して更に小錢を收買する旨、上奏し許可されるが、早くも翌年には破綻をきたしてしまった。それも

非特小民交易全賴錢文、卽輸納正賦亦多以制錢代納。若民

間行使則皆係大小兼用流布、相沿積有年。所合計通省小錢、何啻百萬。今僅以庫銀貳萬兩收鑄之大錢、而欲全收通省百萬之小錢。安能尅期告竣。

であり、收買價格も廉價であつたため收買の實は上がらず一萬五千兩弱が残っている状態であつた。そのため官小錢での納税を公認するよう上奏する。同右、第一一輯、雍正六年十一月十六日、署理甘肅巡撫西安布政使張廷棟奏。

- (11) 廣東の小錢收買上奏に對し、次のような硃批が與えられている。

今制錢不敷民間之用、而復令繳小錢、況收價、必不能盡得其平。

同右、第十四輯、雍正十三年五月十六日、王士俊奏。

- (12) 例えば、江蘇省は雍正五年より收買した銅器でもって、八年七月から一〇年四月まで十五萬串餘を鑄造し終えている。

同右、第九輯、雍正十年三月二三日、署理蘇州巡撫喬世臣奏。

- (13) 『大清仁宗睿皇帝實錄』嘉慶十七年三月己亥、諭。

- (14) 鄭光祖『一斑錄』雜述卷五の「銅禁」による限り、少なくとも京師では本格的に實施されていたようである。

本朝雍正十三年先祖上京秋試。京師黃銅之禁止嚴。信回家中、將典內衆姓已絕未絕銅器、一併交官。

- (15) 『皇朝文獻通考』錢幣考三、雍正十二年。

- (16) 同右、錢幣考二。

- (17) 『宮中檔雍正朝奏摺』第二輯、雍正十一年九月二日、雲南巡撫張允隨奏。

(18) 浙江布政使張若震の上奏によつたものであるが、青錢は俗解しても銅器製造に困難があつたという。唐與崑『制錢通考』卷二。

(19) 『皇朝文獻通考』錢幣考三、雍正五年。

(20) 例えば乾隆十年の廣東省の鑄錢開始においても、戸部は「所有粵東開爐鼓鑄青錢、所需銅鉛錫、應照京局配搭」としている。『高宗實錄』乾隆十年六月庚戌、戸部議覆。

(21) 同右、乾隆八年十一月、戊子、諭。

(22) 同右、乾隆七年七月丙子、江西巡撫陳宏謀奏。

(23) 同右、乾隆十年八月乙巳、署湖廣總督鄂彌達奏。

(24) 論者謂泉布之貴、病在禁銅。今銅禁開矣。而錢價轉昂。又謂物料之貴、病在稅重。今關稅薄矣。而物價未減。

『高宗實錄』乾隆四年四月丁丑、策試。

(25) 陝西巡撫は「陝省銀少錢多、而錢價亦貴」と上奏している(『高宗實錄』乾隆十年十一月、戸部議覆)。當時の史料に散見するのが、「今制錢之所以日貴者、以行使之處甚廣也」という類の認識である。それ故に康熙の小制錢や古錢が幅をきかせている廣東等の状況に對しても柔軟な姿勢で臨んだのである。

朕意不若聽從民便可耳。若必定以法令、使之盡使制錢、反有扞格難行之處。

同右、乾隆十年正月辛巳、命直省鼓鑄。

(26) 乾隆九年、京師の錢貴對策として八條が上奏されるが、その中に京師の穀物商店が雜糧を收買するのに錢を使うのを禁止するというのが含まれている。同右、乾隆九年十月壬子、

大學士鄂爾泰等奏。

(27) 上年湖北因銅觔不敷鼓鑄、經前督臣鄂彌達奏准、暫改鑄八分重之小錢、搭放兵餉。今查小錢與大錢同價、私銷私鑄二弊、相因而起。應仍遵定制、改鑄大錢。

『高宗實錄』乾隆十二年二月辛亥、戸部議准。

(28) 及今二十餘年、局錢絕不見其有餘。按此情形、奸民之銷、仍復不免。請改鑄制錢一文重一錢。

『制錢通考』卷二。

(29) 多額の鑄錢をしているのに錢價が沈靜しないのは「固由行使錢文日益廣遠、而富戶多積錢文之弊、實無底止也」ということによるのであり、既に乾隆三年御史明德が

因近京各處富戶多積錢文……轉飭地方官勸導鄉農富戶、將堆積錢文悉行發賣、毋得仍前多積。

と上奏しているが、各省にも言えるのであるから、

富戶貯藏不得過五十串、其舊時多積錢文、限半年以內、悉行發出貨賣。

と請うた。『宮中檔乾隆朝奏摺』第三輯、乾隆十七年七月十二日、山東布政使李渭奏。

(30) 同右、第四輯、乾隆十七年十月五日、十二月二十日、十八年三月二七日、直隸總督方觀承奏。

(31) 同右、第五輯、乾隆十八年七月十二日、署理四川總督黃廷桂奏。

(32) 臣復與藩臬二司、就督省情形、細加訪察。查直隸地廣糧多、豐收糴賣、錢無別用、遂計收藏。

同右、第五輯、乾隆十八年四月二八日、署理山西巡撫侍郎胡

寶琮奏。

- (33) 惟延建邵等府、出產米穀之區、有等不善經營、專以農田爲利之富戶、出糶米穀、錢文一時頓貯不散、以及開張典舖之家、積貯錢文、待時出易者、實所不免。
同右、第五輯、乾隆十八年五月二十九日、閩浙總督喀爾吉善、福建巡撫陳宏謀奏。

- (34) 河南では「偏僻」に位置する八縣のみ
應令酌留日用外、余俱准在鄰近州縣百里以內之集鎮、出易供課。

としたが、他は現地の大量集鎮で兌換させる旨、上奏している。同右、第六輯、乾隆十八年十月二日、河南巡撫蔣炳奏。

- (35) 在粵商赴場買鹽腳價麻蓆等項、需用錢文、即可於粵省就近酌留敷用、無須楚省錢文。

- (36) 同右、第六輯、乾隆十八年八月十八日署理湖南巡撫范時綬奏。
各處舖戶逢節、收取賬目、銀少錢多。恐外來商販尙有小錢、乘機攙雜、勢難一時剔盡。

- (37) 同右、乾隆三十九年六月二十九日、安徽巡撫裴宗錫奏。
同右、第一〇輯、乾隆十九年十二月十七日、直隸總督方觀承奏。

また二・八月は官吏俸給が支拂われる月であるため錢價が上がるとされていたようである。『宮中檔雍正朝奏摺』第二五輯、雍正十三年十二月二日、張廷玉奏。

- (38) 東省錢文市價并查明、每年於州縣徵糧時錢價卽減、停徵時卽長。

『宮中檔乾隆朝奏摺』第七輯、乾隆十九年三月七日、山東巡撫楊應琚奏。

- (39) 安部健夫「清代に於ける典當業の趨勢」、『羽田博士頌壽記念東洋史論叢』(一九五〇年)。後、安部「清代史の研究」(一九七一年)。

各典當内、零星出入、或有數至一二百串者、亦皆旋進旋出、仍復質散民間。

『宮中檔乾隆朝奏摺』、第五輯、乾隆十八年五月二十九日、暫署湖廣總督湖北巡撫恆文詒奏。

- (40) 陝西ではかつてはなかった「鷺眼錢」等が錢貴とともに外省から流入してきたという。同右、第九輯、乾隆十九年九月二八日、陝西巡撫陳宏謀奏。

- (41) 各兵は銀を支拂われているのだが、その銀一兩につき「大制錢一千文」を給するよう配慮している。同右、第一〇輯、乾隆十九年十二月八日、河南巡撫蔣炳承奏。

- (42) 二九年江蘇は支出が見込まれる九萬五千餘串に間に合わせるため四萬七千餘串を増鑄している。同右、第二二輯、乾隆二十九年十月二日、江蘇巡撫莊有恭奏。

- (43) 今鄉試屆期、士子雲集、又值民間收穫、城鄉士農需錢較多。

同右、第一五輯、乾隆二十二年七月二五日、湖南巡撫陳弘謀奏。

- (44) 乾隆五四年、直隸の四十餘州縣にわたる水害に際して、そうした施策がとられている。『高宗實錄』乾隆五四年九月、直隸總督劉綰奏。

(45) 本年南省收成豐稔、商賈輻輳、現屆歲暮、錢價不無增昂。
『宮中檔乾隆朝奏摺』第一〇輯、乾隆十九年十一月七日、湖南巡撫胡寶瑤奏。

(46) 近奉恩旨、賞借八旗兵丁資生銀百餘萬兩。在兵丁多係兌錢用度。

『高宗實錄』乾隆七年四月庚子、蔣溥奏。

(47) 同右、乾隆四四年三月癸未、諭。

(48) 黃六鴻『福惠全書』卷六「地丁搭錢」。

(49) 『高宗實錄』乾隆五十年三月、安徽巡撫書麟奏。

(50) 同右、乾隆五二年六月辛亥、留京辦事王大臣永琅等奏。錢貴の時には官錢局を通して錢舖に賣却されていた。同右、乾隆三年三月己巳、諭。

(51) 乾隆三八年末福建布政司庫には銀二二五萬二二三兩に對して錢八二串餘だけが、廣西では銀一七七萬四四兩に「搭配兵餉俸工錢」三萬七八九七串があったと報告されている。

『宮中檔乾隆朝奏摺』第三四輯、乾隆三十九年正月二二日、福建巡撫余文儀奏。三十九年二月六日、署廣西布政使事按察使未椿奏。

(52) 王慶雲『石渠餘記』卷三、通考京師用銀。京銅四四三萬斤で計算すると京師二局の鑄錢額は一一八串錢弱となるので符合する。五七〇萬斤なら一五二萬串弱。

(53) 『高宗實錄』乾隆八年十一月、諭。

(54) 多々あるが、納税については例えば『高宗實錄』乾隆四十六年十月癸未、諭。

(55) 兵丁と吏目の家人が喧嘩をし、一方が相手を小錢で梨を買

ったということで罪を捏造しようとした例がある。『高宗實錄』乾隆五二年九月丁亥、諭。

(56) 前掲佐伯論文。制錢による錢相場支配が崩れると更に事態は進行したようで、道光二三、四年に書かれたとされる梁章鉅『歸田瑣記』卷二の「請鑄大錢」には左記のごとく記す。

又如大小鉅錢、與鼓相配而鳴者、爲歲首戲樂之具。從前惟富戶乃有之、近則中小亦多有之。

(57) 「爐民」からの銅の買い上げ價格引上げの際、鑛銅の深化という條件とともに必需物資たる穀物・油・木炭の價格が考慮されていた。『宮中檔乾隆朝奏摺』第一四輯、乾隆二二年四月二十日、署雲貴總督愛必達・署雲南巡撫郭一裕奏。

(58) 乾隆三年の定例では銅百斤毎に九・二兩を支給することになっていたが、それには雜費が含まれており「廠民」が受取るのは六兩でさらにそこから税分を控除されていた(湯丹・大碌の場合一五%)。『皇朝文獻通考』錢幣考五、乾隆十九年。

(59) 「商銅」枠を設けるのは、銅統制の崩壊を避ける安全瓣であつて、乾隆末に收拾がなくなつた私鑄への対策として商銅の廢止案もでたが、裁可されなかつた。『高宗實錄』乾隆五六年七月辛丑、諭。

(60) 『皇朝文獻通考』錢幣考四、乾隆五年。

(61) 乾隆二八、九年で漢銅價格が每百斤一八・九五兩、洋銅價格が定例は一七・五兩だが市價は一九兩であつた。『宮中檔乾隆朝奏摺』第二〇輯、乾隆二九年正月十日、大學士管浙閩總督事楊廷璋・福建巡撫定長奏。また雲南銅は二七年頃大興

廠の銅で一兩、金銀廠で九兩だった。『皇朝文獻通考』錢幣考五、乾隆十二年。

- (62) 同右、錢幣考五、乾隆十八年。正額の四〇萬斤が兵餉支給用で、増鑄分が錢相場調整用であったことについては、『宮中檔乾隆朝奏摺』第二輯、乾隆二十九年五月二十日、湖北巡撫常鈞奏。

- (63) 同右、第一四輯、乾隆二十一年五月二八日、山西巡撫明德奏。

- (64) 同右、第九輯、乾隆十九年八月二八日、湖廣總督開泰、湖北巡撫張若震奏。

- (65) 同右、第二四輯、乾隆三十年四月二六日、四川總督阿爾泰奏。

- (66) 嚴中平『清代雲南銅政考』（一九四六年）に附載されている『銅政便覽』等を整理した數値による限りはそうなるが、『宮中檔乾隆朝奏摺』第三輯、乾隆三十三年六月十五日、雲南巡撫明德奏、によれば乾隆二十二年以降產銅が盛んで年產千二三百萬斤となったが「今三十三年」七八百萬斤に止まったとしている。雲南銅の需要の方は千二百萬斤餘に上っており、そのため雲南の加卯（正規額外）の鑄錢を停止し百十萬斤餘を節約しようとしている。

- (67) 『宮中檔乾隆朝奏摺』第三輯、乾隆二十九年十一月十九日、陝西巡撫明德奏。

- (68) 江西は以前二年毎に二五萬斤の洋銅を收買していたのを一六萬斤に減少させたが、それも不安定であった。同右、三〇輯、乾隆三十三年三月二十九日、江西巡撫吳紹詩奏。

- (69) 同右、第三〇輯、乾隆三十三年四月四日、雲貴總督鄂寧奏。

- (70) 一九年以前銅百斤毎に五・一兩だったのが二七年には六・四兩になる（『皇朝文獻通考』錢幣考五、乾隆十九年）が、なお不足とされた。

- (71) 同右、錢幣考四、乾隆四年。

- (72) 一七年當時で、官兵俸餉銀に九〇萬餘兩を要するのに、地丁商稅をもつてしても二、三〇萬兩不足するとされていた。『高宗實錄』乾隆十七年五月甲子、戶部議覆。

- (73) 『宮中檔乾隆朝奏摺』第三〇輯、乾隆三十三年四月四日、雲貴總督鄂寧奏。財政難は當初からのことであり錢貴の時から既にそうであった。同右、第一四輯、乾隆二十一年四月二十日、署雲貴總督愛必達・署雲南巡撫郭一裕奏。

- (74) 『高宗實錄』乾隆四十七年八月辛未、四川總督福康安奏。

- (75) 同右、乾隆五一年五月、貴州巡撫李慶葵奏。

- (76) 同右、乾隆四五年五月戊子、諭。

- (77) 同右、乾隆四四年十二月丙子、諭。

- (78) 同右、乾隆四九年八月、癸卯、諭。だが既に三一年から三九年の間に、運送すべき京銅五四二四萬斤内三〇八萬斤を不足させていた。三八年頃やや銅產は盛返したものの低銅が多くなっていた。『宮中檔乾隆朝奏摺』第三八輯、乾隆四二年五月二六日、阿桂・李侍堯奏。

- (79) 湖北は二年程の間に三〇萬九千斤を收買したとしている。『高宗實錄』乾隆五八年五月庚申、諭。四川の數値は三年間の累積額。同右、乾隆五九年二月己巳、諭。

- (80) 鄭光祖『一斑錄』雜述卷六の「邊方錢弊」によれば、武昌より東では官板（制錢）を用いているものの、雲南では鑄錢局

のある東川府（ここでは錢賤であつても銀一兩＝大錢三千二百文という相場にとどまつていた）から六驛離れば小錢を一兩＝五千餘文で専用しており、やや下流の「巨鎮」副官村では「錢式中等」のものが一兩＝四千文の相場を形成していた。これより下流の四川は「錢與副官不大異」で一兩＝二千四百五〇～三千二百文、貴州も湖南の常德府に至るまでは「錢亦中等、稍有更變、均非官板」としている。なお武昌と四川の中間にあたる、荊州府が「時其地純用順治康熙青銅錢、銀一兩兌八百餘文、雍正乾隆錢絕少」であつたとしているのは興味深い。

(81) 産銅額の捏造がかなりあつたようである。『宮中檔乾隆朝奏摺』第三輯、乾隆三三年六月十五日、雲南巡撫明德奏。

(82) 例えば陝西では兵餉分等を除き毎年一萬一千餘串が餘り、それを錢價調整に充てることになつていたが、二九年から四二年の間に錢價は八五〇文から九九〇文前後に下がり、そのため八萬二千餘串が錢局に滞留していた。同右、第三九輯、四二年六月二十日、陝西布政使富綱跪奏。

(83) 『高宗實錄』乾隆四四年正月戊戌、江西巡撫郝碩奏。

(84) 『宮中檔乾隆朝奏摺』第九輯、乾隆十九年七月十六日、護理浙江巡撫印務布政使周人驥奏。二八年の江蘇では銀一兩で制錢九四二文鑄造としていて大差はない。同、第一八輯、二八年八月二九日、江蘇巡撫莊有恭奏。ちなみに雲南では一千文の鑄造費用が銀五錢五分であつた。同、第一輯、二十年四月十日、雲貴總督碩色・雲南巡撫愛必達奏。

(85) 京城従前錢貴時、曾設官局平價、未能有益。……而十餘年前錢價忽然平減、直至於今。並非官爲辦理。

『高宗實錄』乾隆四三年十二月乙亥、諭。

(86) 錢貴の時は戸部が五城米局の糶錢を舖戸に換銀させていたが、引受けなくなつてきていた。同右、乾隆四九年八月丁卯、諭。

(87) その種の報告は多々あるが、例えば乾隆五六年に、蘇州で流通する小錢が雲南・貴州方面からもたらされたものであるとの上奏がなされている。

本年正月内、據長麟奏稱、在蘇州地方訪獲收藏小錢、訊係由湖廣雲貴流行到蘇。

同右、乾隆五六年三月丙子、諭。

(88) 例えば江西省では小錢五文を制錢一文で收買していた。しかしそれはあまりにも市場相場を無視したものであつたため、小錢三文で制錢一文に交換するというような別のレートを生間て形成させるだけであつた（同右、乾隆五六年三月丙子、署江西巡撫姚泰奏）。小錢そのものが雑多なものであるため、重量單位で換算率を定めていた例が多い。山東省では小錢一斤毎に大制錢九〇文としていた（同右、乾隆五六年七月、山東巡撫惠齡奏）。九〇文は重量にして〇・六七五斤。

ただ收買の効果をあげた廣西省が「給銀」であつたのは興味深い（同右、乾隆五九年十一月、廣西巡撫姚泰奏）。

(89) 收買による小錢排除が効果を示さないため、多額供出の場合を除き、方針を轉換している。同右、乾隆五六年五月庚寅、諭。だが廣西では無給の年だけ收買額が極端に落込んで

いる。同右、乾隆五十九年十二月、廣西巡撫姚燾奏。

- (90) 蓋錢肆易錢、價無一定。自驚眼以至制錢凡數等。……以銀易錢、相錢議價。錢既參錯、用者不便。乃計所易之錢、折受番銀。故番銀之價昂於庫銀。余年四十歲以前、尙無番銀之名。

汪輝祖『病榻夢痕錄』下、嘉慶元年。

- (91) 同『病榻夢痕錄』嘉慶六年。

- (92) 法式善『陶廬雜錄』卷二に記載してある戸部銀庫の積存銀數によれば、乾隆一三年の二七四六萬三六四五兩が乾隆期(三十九年まで記載)の最低で、二七年から上昇しはじめ、三六年には七八九四萬一兩を記録している。

- (93) 近日錢價增昂……或加卯鼓鑄、或搭放俸餉、綏未能減落。推原其故、皆由年來所發內帑過多、輾轉流通、以致銀價日賤、錢價日增。

『大清仁宗睿皇帝實錄』嘉慶七年六月丁卯、諭。

- (94) 前掲佐々木論文。

- (95) 註(24)、並びに『宮中檔乾隆朝奏摺』第七輯、乾隆十八年

十二月二日、直隸總督方觀承奏。

- (96) 中山美緒「清代前期江南の米價動向」『史學雜誌』八七一九。

- (97) 『宮中檔乾隆朝奏摺』第五輯、乾隆十八年五月十日、河南巡撫蔣炳奏。乾隆十八年七月十三日、署兩江總督鄂容安・江蘇巡撫莊有恭奏。

- (98) 崇禎元年正月から九月一五日までの鑄錢高は一三萬串弱であつた。『續文獻通考』錢幣五。

- (99) 近日市中行用、不見有順治康熙雍正三朝之錢、即乾隆嘉慶錢亦甚寥寥矣。非皆燬而爲器之故乎。

前掲『歸田瑣記』卷二「諸鑄大錢」。

- (100) 遅くとも乾隆四十年頃には錢票がかなり普及していたようである。『一斑錄』雜述卷六、「洋錢」。土地賣買等にも錢票が使われていたことについては『林則徐集』奏稿八「鄭藩等私鑄案審明定擬摺」道光十八年四月二六日。

- (101) 黒田「清末湖北省に於ける幣制改革——經濟裝置としての省權力」『東洋史研究』四一—三。

Meanwhile, the unusual local conditions in Fujian and the development of cash cropping brought about a state of constant grain shortages. But for Fujian rural society, with its developing commercial production, the problem of grain was not so much its rising price but rather its actual shortage. That is to say, for the tenant farmers, keeping rice in the local area became an urgent problem. Thus we can properly say that the resistance of tenant farmers to paying rents to landlords was an aspect of the struggle to prevent rice from leaving the local area (i. e. grain transport obstruction).

THE APPRECIATION OF COPPER CASH IN THE QIANLUNG 乾隆 ERA

KURODA Akinobu

In the Qianlung era, the Qing government minted a great quantity of copper cash which had not been done before. What made the government do so?

The monetary system under the Qing dynasty was on a parallel standard. There was no fixed ratio between silver and copper cash. Although copper cash formed a large part of the circulating medium for retail, generally most of the cash that was coined did not return to the Mint, but stagnated in the local markets. In the first half of the Qing period, the rate of exchange for copper cash against silver kept rising. Relative insufficiency of cash caused all kinds of "small cash", namely illegal cash, to be accepted. The government intended to use good money, legal cash, to drive out bad money, small cash, and therefore established local Mints to spread legal cash over the empire.

Since minting needed vast copper supplies, the government had to control the production and circulation of copper. This brought out a strange phenomenon: the intrinsic value of a piece of legal cash was greater than its face value. Naturally some people melted down legal cash. Nevertheless, the government continued to mint, so that apparently

most of the small cash disappeared.

But the uniformity of copper cash collapsed in the second half of the Qianlung era. A large quantity of small cash appeared again. As the domestic output of copper decreased, the government could not keep up a one way supply of legal cash. The essential cause was as follows: while small cash circulated according to the demand for a means of payment in the local areas, legal cash was minted according to government expenditure. The government could not keep up with the upsurge in the demand for local currency, and was thus prevented from unifying the monetary system.

THE *ĪNANČĪ* FAMILY IN TURFAN UYGHUR SOCIETY

UMEMURA Hiroshi

Recent studies of Uyghur society use civil documents as the historical materials. In this study the author has tried to research the actual conditions of the life of Uyghur landowners by an analysis of three types of Uyghur documents, USp. 107-113, USp. 114-123, 124-127 and SJ Kr. 4/638, and others, all of which were discovered in the Turfan region and date from the 13th to 14th century.

We find that these documents speak of the large family of *īnančī*, which lasted for at least three generations as recorded in SJ Kr. 4/638. The supposed genealogy is shown in table VI.

It is shown that some of the constituents of the family owned slaves, and certain brothers bought and sold land to each other in order to ensure that the land all remained within the family. Keeping land within the family was one way to maintain the social influence and prestige of the family at a time when Uyghur society was politically unstable. It is worthy of attention that the *īnančī* family used to borrow grain on the occasion of funerals as recorded in SJ Kr. 4/638. When *īnančī* died, his family borrowed grain to pay for the funeral from four persons, whose father was regarded as having connections with holders of official power.